

京狩野家の耕作図 —堀家本原本との関係を中心に—

多田羅多起子（京都工芸繊維大学大学院）

耕作図は中国の耕織図を源流とし、室町時代に日本に伝播した後、狩野派の重要なレパートリーとして描き継がれた。耕作図の粉本としては、室町時代から近世初期にかけて非常に強い拘束力を持っていたと考えられる伝梁楷本がよく知られている。耕作図の最も古い現存例である大仙院客殿礼の間の伝狩野之信筆 四季耕作図襖 をはじめ、伝梁楷本に依拠する作例は多数現存している。

京狩野家においては、近世初期の時点において、伝梁楷本に加え、永納が翻刻したことで知られる宋宗魯本、1989年に発見された堀家所蔵 四季農耕図巻 の原本（以下、堀家本原本と称す）という複数の粉本を所持していたと考えられる。そのような多様な選択肢の中でも、堀家本原本は、山雪筆 四季耕作図屏風（東京藝術大学蔵）、永納筆 耕作・養蚕図屏風（個人蔵）の他、幕末の9代目永岳筆 四季耕作図屏風（個人蔵）にも図様が引用されており、近世を通じて、京狩野家内で重要な役割を果たしていたことが想定される。堀家本原本の最大の特徴は、伝梁楷本、宋宗魯本と異なり、完全に日本の農村風景として描かれている点にある。これは、久隅守景の一連の和様耕作図とは共通しない図様であり、いわゆる「近世における和様耕作図の大成」が、単線的な展開ではなかったことを裏付ける興味深い粉本である。

しかしながら、この堀家本原本については、美術史の領域について等閑視されてきた。堀家本が発見された後、1991年に、農耕史の研究者である河野通明氏によって、原本の筆者は山楽であるという説が提示されたが、それに対する議論は進展していない。堀家本の奥書には、延享3年（1746）に山雪筆の原本を写したものであるという記述がある。ところが、画中に、原本から写したと推察される「天正元年」という書き込みがあることが、山雪を筆者とする根拠を揺るがし、事態を複雑にしている。すなわち、誰がいつ描き、どのように伝来したのか、現時点で確証が得られない状況である。

本発表では、実際に図様の面で堀家本原本に連なる作品群を分析し、堀家本原本と京狩野家の強い結びつきという点において河野説を補強する。さらに、作例相互の関係を検証し、系譜を明らかにすることによって、京狩野家の中でどのようにこの主題が受け継がれ、改変されていったかを考察する。堀家本が写された延享3年は、5代目永伯の時代である。現在、制作実態がほとんどわかっていない京狩野のブラックボックスともいえるこの時期にも、確かにこの粉本は機能していた。脈々と受け継がれた堀家本原本の問題に再考察を加えることは、京狩野家という流派の個性とともに、各当主の意識を明らかにすることに繋がるだろう。